

北海道釧路沖発見の有舌尖頭器について

西 幸 隆

On a Tanged Point Found from the Sea
Bottom off Kushiro, Hokkaido

Yukitaka Nishi

1. はじめに

北海道東部に位置する釧路地方においては、現在までのところ旧石器時代に相当する遺跡が極めて少ない。わずかに7箇所確認されている程度であり、その分布も釧路湿原周縁の台地に限られている。また、出土遺物も1遺跡1点ないし数点と少なく、それぞれの石器組成を考察できる状況には至っていない現状にある。この時期の遺跡数の少ない要因として、旧石器時代を対象とした遺跡の踏査頻度や海岸台地の浸食作用による遺跡の崩落に加え、石器原産地との距離など幾つかの条件に起因するものと考えられてきたところである（岡崎・澤1974）。

本稿で紹介する有舌尖頭器は、形態の違いはあるが、これまでに釧路市貝塚町1丁目遺跡（畑1976）、鶴居村下雪裡2遺跡（岡崎・澤1974）の2箇所検出されている。しかし、本資料は、上記の2遺跡とは距離的にも離れた釧路沖にあたることから、今後、旧石器時代の遺跡立地を検討する上においても、また、釧路湿原に加え、広範囲に及ぶ当時の海進・海退現象を探る上でも極めて重要な鍵を握るものと理解される。

本資料の紹介にあたり、海底地形に関しては釧路公立大学岡崎由夫教授の御教示をいただいた。また、釧路市立博物館澤 四郎館長、国学院大学小林達雄教授、北海道教育委員会畑 宏明氏から種々の御教示をいただいた。さらに文献については釧路市埋蔵文化財調査センター石川 朗氏の手を煩わせた。記して深謝申し上げる次第である。

2. 発見の経緯

本資料は、昭和60年12月5日、当時釧路市柏木町在住の稲垣 薫氏によって釧路市埋蔵文化財調査センターへ持ち込まれたものである。その際、実測図の作成と写真撮影を行ない、翌日資料を返却したため現在手元にはない。発見された石器は、稲垣氏によると釧路沖真南14マイル、漁船での航行2時間の地点にあたり、カレイの刺

し網漁の際に引き上げられ、直接遺物を発見した仲間から護り受けたという。稲垣氏は、石質の異なる各地の石を収集されていることから、石器という視点よりむしろ石質に興味を持たれ持参したという。

3. 海底地形と発見箇所

釧路市付近の海岸線の地形は、旧釧路川の河口に位置する釧路港を境として、東側は急崖を呈する岩石海岸からなり、海拔高度20～30m前後の釧路段丘が発達している。さらに東側では高度を増し根室半島まで同じような地形が連続的に展開している。一方、西側では東側とは対照的に砂丘地が発達し、所々に岩石海岸を残しながらも、なだらかな砂浜海岸が広尾町付近まで及んでいる。こうした海岸地形の在り方は、当然のことながら海底地形とも関連している。釧路港の沖合は、南方へ12km、水深100mほどで「釧路海底谷」と呼ばれる比較的急崖面をもつ谷が発達して日本海溝に連なっている（第1図）。この釧路海底谷を狭んで西側の海底面の底質は、一様に砂質や泥質の面で覆われている。また、東側では海岸線と同様に岩盤底からなり、水深40m前後、海岸線からの距離5kmほどまで続いている。ただし、所により水深65m前後まで岩盤底の広がる箇所もみられる。地形的には、緩やかに水深を増して沖合に向かっており、釧路海底谷から外れた部分での海底地形に複雑な在り方は認められない。水深40m～65mを越え、さらに深くなると一変して泥質で覆われ、西側と同じような基盤からなっている。

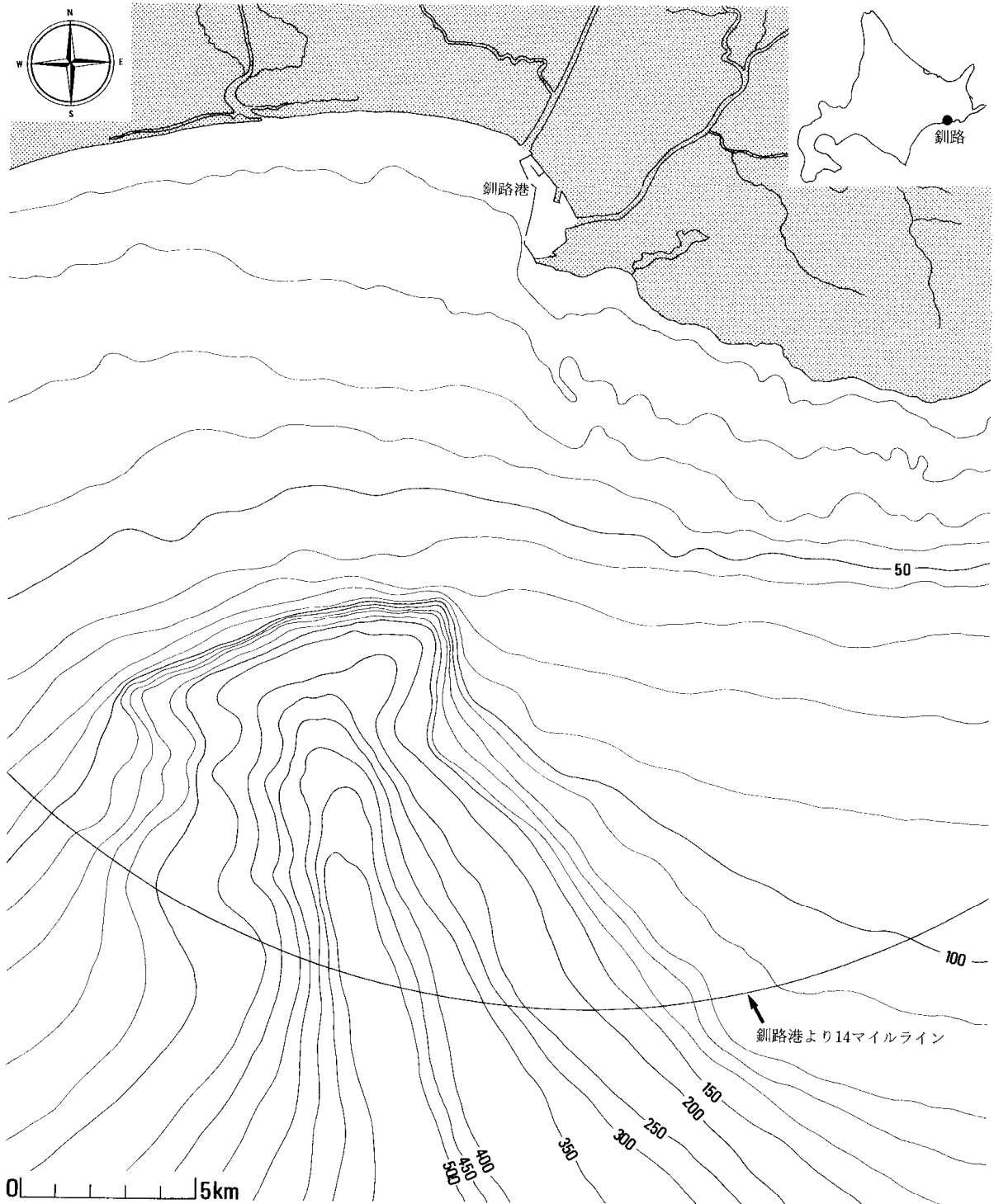
遺物の発見箇所は、釧路港から真南に14マイルの地点、すなわち沖合22.53kmの距離にあたる。この距離を釧路港を中心として半円状に描いたのが第1図に示したラインである。発見者の述べた真南の位置を見ると、釧路海底谷に達してしまい、水深200mから500mの範囲に及ぶことになる。従って、発見箇所については、海底地形から見ても西側は該当せず、釧路海底谷の東側の縁辺部にあたる水深120m前後から100m前後の位置が想定で

きる。この付近の海底は、図にも明らかなように比較的緩やかで、若干距離を前後したとしても水深の違いや大きな海底地形の変化は見られない。ここでは明確な地点を提示できないが、水深120～100m 前後の位置として大筋において誤りはないと考えられる。また、付近の海底面については、上述したように一面が泥質で覆われており、海底面の状況が遺物の保存状態とも深く関わって

いると考えられ、原位置から取り上げられたか否かを探る上でもひとつの手掛かりとなろう。この点については後に触れたい。

4. 遺物について

釧路沖より発見された石器は、第2・3図に示した有舌尖頭器1点である。その他の遺物はない。表面の観察



第1図 釧路沖の海底地形

(海上保安庁水路部 1935 海図第26号「釧路港至濱中灣」より作図)

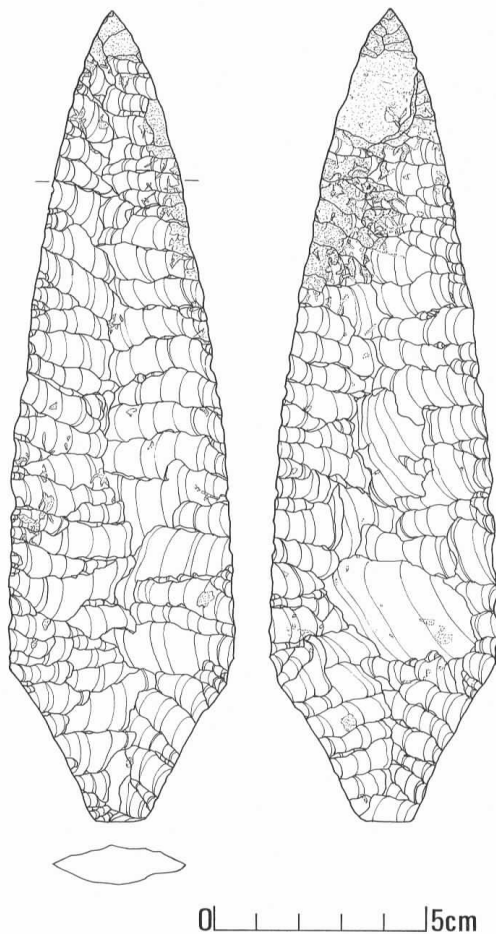
から硬質頁岩とみられる。長さは19.1cm、最大幅5.3cm、最大厚1.4cmを計る。先端部は比較的突鋭に作出しており薄く、基部へ向かうにしたがって厚さと幅を増す。先端部から基部にかけては、張り出さずにやや直線的な側縁部を形成しており左右対称な形態を備えている。基部は、両端部でかすかに内側に入り込み基底部へ達しており、この石器の形態的特徴のひとつとして捉えることができる。基底部は、図にも明らかなように平坦に調整された剝離痕が観察されるが、わずかに欠損したような痕跡もある。ほぼ完形品とみてよい。押圧剝離は、部分的に不規則な箇所をもつが比較的等間隔に施され、かつ同一方向に剝離面を作出している。両面の先端部付近では、比較的細かく加工が施される傾向がある。先端部や他の所々にコケムシ類が付着し部分的に剝離面を観察できない箇所もあり、写真にも見られるように白く石灰化している。

5. 若干の考察

これまで、海底から発見された有舌尖頭器の報告例としては、下北半島長後沖の一例があり、沖合4マイル、

海底150～160mから発見されている（橘1987）。本例との共通点は、石器自体をみても綾線が磨耗していないという点である。釧路沖14マイルの海底面の底質は、泥質を呈し海水に大きな動きの見られない箇所である。人為的以外に石器の移動が考えられないことからすると、原位置から引き上げられたことになり、旧石器時代の海岸線や遺跡立地を検討する上でも貴重なデータといえる。しかし、両例とも水深100mを悠に越える地点であり、原位置とした場合にまったく問題が生じないわけでもない。岡崎由夫によると、釧路市三津浦遺跡付近の縄文期の海岸線の浸食量を論じた中で、12,000年前ころを、現海面下60—40mと推定している（岡崎1976）。この場合、単純にみても本資料の発見箇所との間に50mもの水深差が生じてしまう。また、ウルム氷期の最盛期についても現海水準より100ないし140mといわれ（加賀美・奈須1964、湊1966）、この点も問題が残ることになる。いずれにせよ、ここでは原位置からの発見の可能性が高いことを付け加えておきたい。

さて、有舌尖頭器についてであるが、本資料は長さ19.1cmを計り、完形品としては道内において他に類例を



第2図 釧路沖発見の有舌尖頭器

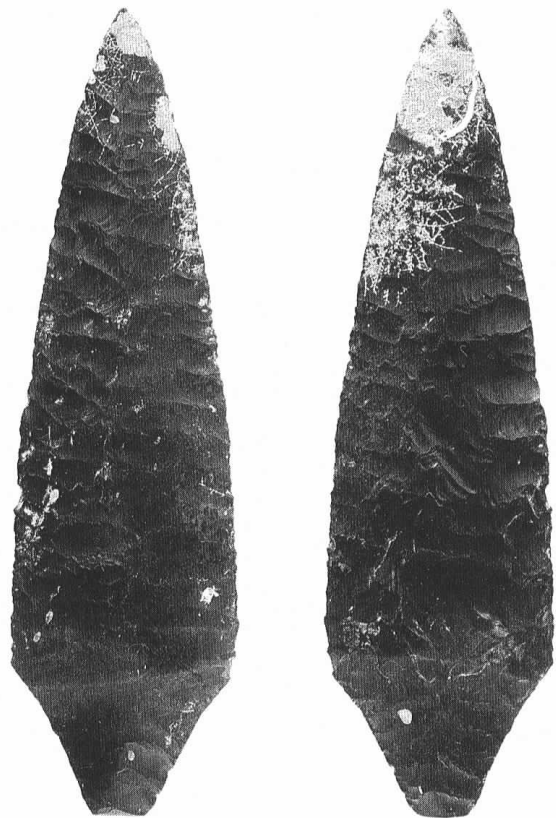


写真1 有舌尖頭器

見ない大きさである。これまで大型といわれた有舌尖頭器は少なくとも16cm前後の大きさである。これらは、杉浦重信も指摘しているように幅広いタイプとそうでない二通りがある（杉浦1987）。前者は、今金町神丘2遺跡の有舌尖頭器（寺崎1990）によって代表される。このほか完形品ではないが置戸安住遺跡（戸沢1967）、端野町上口遺跡A地点（加藤・藤本1969、加藤ほか1970）、滝ノ上町（山崎1965）、服部台2遺跡（小栗ほか1982）などに類例がある。後者は、湯の里4遺跡（畑編1985）、中本遺跡（加藤・桑原1969）、広郷8遺跡（宮編1985）東麓郷1遺跡（杉浦1987）が知られる。このうち、釧路沖発見の有舌尖頭器は後者のタイプに含まれる。基部形態からみて、湯の里4遺跡の最も大きな資料に近似するが他に比較資料はない。後者に含まれる有舌尖頭器は、細石刃石核を伴わない段階に至ってから出現する可能性が指摘されているが（杉浦1987）、紹介したように類例が多出している現状にない。そうした傾向が今後も肯定されるならば細石刃石器群に後続する有舌尖頭器の一員として理解される。しかし、本資料は他の伴出石器をもたないため、ここで編年の位置づけまでは即断できない。

従って、本稿では資料の紹介に留め、大型の有舌尖頭器の出現時期と共に、上述した縄文海進における当時の海岸線と発見資料との関わりあいについての問題提起を行ない、今後に類例を待ちたい。

引用参考文献

- 岡崎由夫 1976 三津浦遺跡の地形 釧路市三津浦遺跡発掘報告 釧路市立郷土博物館
- 岡崎由夫・澤 四郎 1974 自然・先史編 新釧路市史 第1巻
- 岡村道雄 1988 日本石器時代史 8. 後期旧石器時代のくらし(1) 季刊考古学第23号
- 小栗法韶・畑 宏明・千葉英一 1982 服部台2遺跡・近藤台1遺跡 白滝村教育委員会
- 加賀美英雄・奈須紀幸 1964 古久慈川一後氷期海面による埋積谷 日高教授還暦記念論文集
- 加藤晋平・桑原 護 1969 中本遺跡
- 杉浦重信 1987 北海道の有舌尖頭器 東麓郷1・2遺跡 富良野市文化財調査報告第3輯
- 橋 善光 1987 下北半島長後沖発見の有舌尖頭器について 考古学ジャーナルNo279
- 寺崎康史 1990 北海道今金町神丘2遺跡の発掘調査 考古学ジャーナルNo327
- 戸沢充則 1967 北海道置戸安住遺跡の調査とその石器群 考古学集刊第3巻第3号
- 長沼 孝編 1985 今金町美利河1遺跡 財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 畑 宏明 1976 貝塚町1丁目遺跡出土の有舌尖頭器 釧路博物館報No237
- 畑 宏明編 1985 湯の里遺跡群 財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 湊 正雄 1966 日本列島の最後の陸橋 地球科学85—86
- 宮 宏明 1985 広郷8遺跡(II) 北見市教育委員会
- 山崎博信 1965 北海道紋別郡滝ノ上町の石器その3 Field No.2
- 横山英介 1986 北海道の有舌尖頭器 考古学ジャーナルNo258
- 吉崎昌一 1977 立川以後 立川(復刻) みやま書房